

平成26年度小笠原村立小笠原小学校

2月号 (H27.2.2)

TEL 04998-2-2012

校長 西澤 盛和

# 学校だより

## 学校公開・道徳授業地区公開講座

校長 西澤 盛和

先日は学校公開に多くの保護者・地域の皆様にご来校いただき、誠にありがとうございました。今回は道徳授業地区公開講座といたしまして、各学年がいじめをテーマに道徳の授業を公開し、学校としての取り組みや考えを私の方から皆様にお話しさせていただきました。

話の中で申し上げましたように、いじめ防止対策推進法が平成25年に制定され、保護者の責任が第9条により明文化されています。【第九条 保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、その保護する児童等がいじめを行うことのないよう、当該児童等に対し、規範意識を養うための指導その他の必要な指導を行うよう努めるものとする。】また、この法律ではいじめが深刻化し、被害児童が相当の期間学校に来られないような事態になれば、すぐに第三者機関の調査が入ることが規定されています。学校の責任と同時に、加害児童並びにその保護者の責任が厳しく問われることになります。

「いじめは、どの学校にも、どのクラスにも、どの子供にも、起こりうる」と国立教育政策研究所のいじめ調査(2004-2009)で報告されたように、いじめに理由などありません。理屈を持ちだすのは常にいじめの側であり、それを正当化しようとするのは誤りです。どんな理由があろうとも、人を傷つける行為は厳しく指導し、正していくことが必要です。

「そんなささいなこと」「そんなことはよくあること」「おたがいさまのこと」といじめる側の保護者はとらえがちですが、いじめられている側にとっては、ささいなことでもなく、深刻な、たまたなくつらい出来事であり、それが相当の期間継続しているという重大事なのです。この決定的な意識の差が、いじめを継続化し、深刻化していきます。保護者の皆様をお願いしたいことは、「ささいなうちに、その行為をやめさせること」です。それが何より大切であり、いじめをなくすための唯一の方法だと考えます。

2月3日(火)の全校朝会で子供たちに再度いじめ防止について話をしました。その中で「人を傷つける行為は直ちに保護者に連絡する」と伝えました。学校から連絡があった場合は、ささいなことと思わず、「ささいなうちにやめさせるため」とご理解ください。いじめをなくし、すべての子供が安心して、楽しく生活できるようにご協力ください。保護者同士の関係をよくすることも、いじめ防止には大事な条件です。被害児童の保護者に、親として謝罪する姿を子供に見せることは、人を傷つける行為がどんなに悪いことかを教えること、二度とさせないことにつながると思います。意地悪をされ続け、嫌なことを言われ苦しみ続けている子供の気持ちを、まずは保護者同士が共有し、理解し合いたいものです。

学校も全力でいじめ防止に取り組んでいきます。いじめ防止には保護者の皆様のご理解ご協力が欠かせません。どうか学校にお力添えをよろしくお願いします。

2月の行事予定		16	月	全校朝会	㊟ヨーグルト
1	日	17	火	新一年保護者会 14:30～	
2	月	18	水	ゲーム集会、職員会議	
3	火	19	木		
4	水	20	金		SC
5	木	21	土		
6	金	22	日		
7	土	23	月	全校朝会、芝生の日、芝生調査	
8	日	24	火		
9	月	25	水	運動集会	
10	火	26	木		
11	水	27	金	1年保育園交流	㊟ヨーグルト飲料 SC
12	木	28	土		
13	金			音楽集会、6年中学体験、クラブ	SC
14	土				
15	日				

## 2月の生活目標

担当 加藤 真市

### ありがとうの気持ち

2月の生活指導目標は『ありがとうの気持ちを表そう』です。残すところ今年度もあとわずか。もうすぐ学年が1つ上になります。また、6年生は中学生になります。お世話になった地域の方々や先生方に。いろいろな学年の友達に。卒業する6年生に。ありがとうの気持ちを伝えていきましょう。

小笠原小学校では、4つの『あ』を生活目標に掲げています。『安全、挨拶、後片付け、ありがとう』も心がけていきましょう。

## 2月の生活目標

担当 齋藤 直樹

### ・自転車のスピードの

#### 出しすぎに注意しよう

島内の交通量は少ないですが、坂が多く自転車に乗っていてけがをする場合もあります。自転車の安全な乗り方については、日常的に学校では指導をしていますが、ご家庭でもブレーキなど装備の故障がないか定期的な点検をよろしくをお願いします。

## 書き初め大会について

担当 渡邊 義男

1月9日（金）に「書き初め大会」が開催されました。新しい年を迎え、3学期初めての全校行事。全学年で体育館に集まり開会式を終え、1・2年生は各教室で硬筆、3～6年生は体育館で毛筆です。教室では「カツカツ」と聞こえる鉛筆の音、体育館では半紙を取り替える音が静かな空間の中で響いていました。今年もどの学年も凜とした雰囲気の中で集中して取り組んでいました。再び体育館に集合して閉会式を終え、高学年は片付けを担ってくれました。

今年も金銀銅賞を選出して、母島小学校の学習発表会に送りました。さらに硬筆1点、毛筆3点を公立学校美術展覧会に送りました。冬休みにはどの学年も書き初めが宿題になっていました。ご家庭でのご協力ありがとうございました。



## 道徳授業地区公開講座 「いじめ」を真剣に考える日 道徳担当 田中成和

先日の「道徳授業地区公開講座」・学校公開では、たくさんの保護者のみなさん、地域の方々のご参加をいただき誠にありがとうございました。新年書き初め展も同時に開催させていただきました。どの作品も凜とした清々しさ漂う力作ぞろいで廊下掲示を飾ってくれました。

道徳の授業では、各担任がそれぞれの発達段階や学年の実態に合った授業内容・方法を選び工夫して行いました。児童一人一人が「いじめ」をしっかりと受け止め、今の生活につながる道徳の学びや価値を考える場を創りました。生活指導部でも授業と連動して年間を通じ「いじめをしない・させない小笠原小学校」を合い言葉に全校指導を深めています。年に3回行う「ふれあい月間」では、①学校生活アンケート②面談③道徳いじめ関連内容授業④不登校調査を欠かさず実施し繰り返し指導しています。

今回の「公開講座」は、広く保護者・地域の方々にも「いじめ」について一緒に考えていただきました。道徳地区公開講座は毎年行います。これを機会に、ご家族のみなさんと児童、地域と一緒に「道徳」や「いじめ」について真剣に考える1日にしていただけることを望んでいます。将来、島を支える子ども達の今と未来のために、生きる力になり、生活に広がる実践的な「道徳」をめざして「いじめのない島」になるよう、職員一同、子ども達と共に考え指導して参ります。今後とも、ご協力・ご支援をよろしくをお願いします。ありがとうございました。

## できるだけ小さい頃から“サイクル”をつくることが重要

秋山 仁(あきやま・じん)

数学者。東京理科大学教授、理数教育研究センター長、「数学体験館」館長。専攻はグラフ理論、離散幾何学。理学博士。ヨーロッパ科学院会員、NHK 高校講座「数学基礎」講師などを務め、数学オリンピックの参加にも尽力。東海大学教授を経て2012年4月から現職。2013年には東京理科大学「近代科学資料館」館長にも就任した。

数学者の秋山仁さんが次のようなことを語っています。

【私自身は算数や数学は好きでしたが、大してできる方ではありませんでした。つまずいたところなんて、それこそ枚挙にいとまがない。分数の通分も、因数分解も、ベクトルも、最初はほとんど理解できませんでした。授業中に先生が「分からない人、手を挙げて」と言うからしかたなく手を上げると、「もう一回丁寧に説明するからよく聞いて」と言って、一生懸命説明してくれる。それでも分からない。二度目となるとさすがに先生に悪いと思って分かったふりをするんだけど、実は何も分かっていなかったんです。でも、算数や数学を学ぶ上では、粘り強く考え、理解できなかった事柄を自分で克服し、自分の力で分かるようになることがとても重要なんです。何度かそういうことを積み重

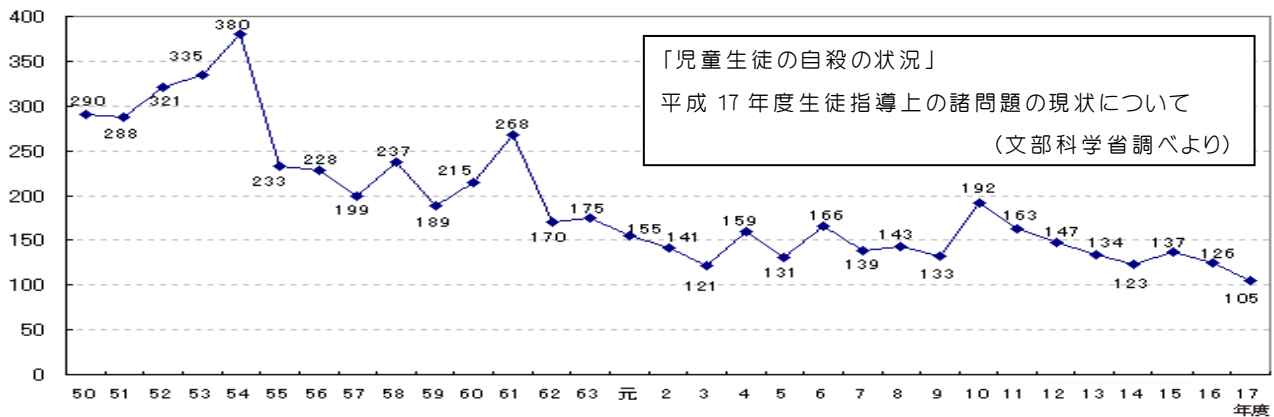
ねれば、分かることの醍醐味や達成感を肌で感じるようになり、それが自信につながります。その先にはまた、理解できない事柄が次々と待ち受けていますが、以前の成功体験に味を占めていれば、次も挑戦しようという気持ちになる。できるだけ小さい頃からこのサイクルをつくるのが重要なんです。】(中略)【先ほど、子供たちにすぐに答えを教えず、自分の力で考えさせることが大事だと言いましたが、授業という時間的な制約の中でそれを実践するのはとても難しい。でも、一度面白さを知ってしまった子は言われなくても考え続けて自力で答えを導けるようになります。そうなれば算数や数学に限らず、人生のさまざまな場面で難問に直面したとき、何をすべきかを考えていく姿勢が育っているから、その教育はほとんど成功です。】(『Science Window』冬号 2015 1-3)

この“サイクル”というのが問題解決型の学習スタイルです。問題解決学習は古くは教育学者ジョン・デューイ(1859-1952)に提唱されました。平成10年に告示された学習指導要領で打ち出された「新しい学力観」という4観点の目標準拠評価への移行に基づき、特に重視され、4観点の最上位に位置したのが「関心・意欲」という情意領域です。「関心・意欲」とはすなわち「主体性」の評価であり、子供が主体的に学習することができているかどうかを評価する観点です。それまで評価の最上位に位置していた観点は「知識・理解」であり、教師の教えたことが理解できているかどうかのテストを実施し、その点数が直接大きく評価に影響していました。しかし、「主体性」を評価するには、教師が教え、テストをして、その点数で評価するという旧来型の方法では不可能です。そこで、授業そのものを教師主導の教え込み型から、子供が主体的に問題を解決していく問題解決型の学習スタイルへと変えていかなければならないという教育現場にとって大変革の考え方が導入されたのです。それこそ、人間の主体性を重視するというデューイの教育思想の導入です。

この平成10年告示の学習指導要領はその他にも、学校完全週5日制の導入、総合的な学習の時間の新設等が盛り込まれた、俗に言われる「ゆとり教育」への大改訂でした。私は「子供主体の授業」という考え方には大いに刺激され、この考え方には大いに賛同したものです。

しかし、ご存じの通り、「ゆとり教育」は様々な批判を受け、この学習指導要領全面実施の平成14年には、文部科学大臣が異例の「学びのすすめ」を発表し、真逆の「脱ゆとり」を明確に打ち出したのです。平成20年告示の学習指導要領では、指導内容が3割増加し、授業時数も増加しました。そして、平成27年現在の日本はまた、偏差値による学校の序列づけが当り前の世の中に戻り、子供たちを選別する受験は過熱する一方です。小学校の英語はまだ“教科”でないのにも関わらず、私立中学校の受験科目には英語が導入される時代なのです。

この平成10年頃からの「ゆとり教育」をめぐる混乱は、国家行政の政策問題であるのにも関わらず、社会的な批判の矛先は学校にも向かい、何もかも悪いのはすべて学校であるかのようにあらゆる苦情が押し寄せてきました。そうなれば学校が正常に機能するはずもなく、学級崩壊は当たり前のように続出し、コントロールを失った学級の中ではいじめが横行し、多くの子供が傷付き、命さえ失う子供は増加しました。



学校はその権威、信頼を急激に失い、教員の精神疾患は多くの職業の中で罹患率第1位になり、教員の自殺者も出るまでになりました。モンスターペアレントという言葉が生まれたのもこの頃です。そのような混乱の中で、学校は授業を教師主導から子供を主体とした学習へと変換する作業よりも、学校を建て直す作業に追われてきたというところです。

そして今また、今度は「アクティブラーニング」という呼び名で、問題解決型の学習を含め、子供たちの主体的能動的な学習への変換が声高に叫ばれています。

しかし、平成10年に大いに賛同した心持とは違って、現在の私は無条件にこの「子供主体の授業」へ賛同することができないでいます。それくらい学校現場の混乱は強烈なものだったのです。以下は現在の私の考え方です。

学校は教科指導だけでなく、生活指導や集団適応指導を通して集団の中で社会性を身に付けさせていく大きな責務を負っています。人権教育も道徳教育も、教科を含め学校の全教育活動を通して行っています。これは子供が主体的に学ぶようなものではありません。また、学校だけで身に付けさせることができるものでもありません。学校・家庭・地域の大人がそろって、人としての生き方について、範を示し、導き、教え、諭し、授け、育てていくものです。そうして初めて、教員と児童の人間関係、児童同士の人間関係が良好になり、学級が成立します。学級が成立して初めて授業が成立します。授業の目的やねらいを子供全員が共有して初めて学習が成立します。そして、ここまでの前提がない限り、子供主体の学習は成立しないということです。一足飛びに理想的な学習は展開できないのです。学級が成立しないままに、子供に主体性を持たせれば学級は崩壊していきだけのです。小学生の発達段階で集団を主体的に制御することを求めるのは無理です。子供のエネルギーは互いに傷つけ合う方向に向かい、いじめを助長することになるだけです。私はここ十数年の混乱の中でそれを目の当たりにしてきました。また、学級を成立させるためには保護者の皆様の協力がないとどうにもならないことも経験してきました。躰や生活習慣の育成など家庭教育のほとんどを学校に押し付け、悪いのはすべて学校の責任とするような一方的な考え方は、結局は学校を危機に陥れ、学級の成立を阻み、その学級の子供が犠牲にならざるを得ない状況になるだけです。保護者の皆様と学校が良好な関係でいることが子供の教育には何よりも大事なことなのです。おかげさまで、今年度はどの学級でも子供主体の授業を展開できるようになっています。これは保護者の皆様の学校へのご理解ご協力のおかげなのです。心より感謝申し上げます。

私は校長として「子供主体の学習」を展開する授業をもっともっと行いたい。私の理想も冒頭の秋山先生の考えと同一なのです。ただ、小学校段階では100%の子供主体はあり得ないということです。環境を整え、やる気にさせて、進み具合を把握し、励まし、助言し、必要あれば手助けし、子供が自分でできるところまで支援し続け、やり終えた時には子供がすべて自分の力で到達したように称賛の言葉かけをするということなのだと思えます。褒めることが大事とされる理由はここにあります。このようなサイクルを作るためには、叱咤よりも、励まし、助言し、称賛する言葉かけになるからです。やみくもに褒めればよいわけではなく、このサイクルに応じて「褒めて伸ばす」ことが大切なのです。できるだけ小さなころからこのサイクルをつくるためには、できるだけ小さなころから、その前提である発達段階に応じた社会性の発育が伴わなければならないのです。そのためには、厳しく教え込む指導（躰を含め）がとても重要になってくるのです。不易と流行とはよくいますが、「子供主体」「褒めて伸ばす」という流行を成り立たせるには、それを成り立たせる「躰」「指導」「教授」という不易の部分がより重要になっているというのが現在の私の考えです。